

趣味と国益（上）

畠山 襄 *Noboru Hatakeyama*

（一財）国際貿易投資研究所 理事長

概して、外国企業や政府の幹部は趣味が広い。代表的なものは音楽と絵画であり、それらも単に鑑賞するだけでなく、ピアノやヴァイオリンと本格的か、半本格的になっているケースもないではない。日本の経済界でも故人となられてしまったが、鈴木治雄氏や中山善郎氏の油絵は玄人にも引けを取らなかつたし、官界では齊藤邦彦元外務事務次官や兄玉幸治元通商産業事務次官のピアノも有名だ。お二人は、故中村紘子さんとの連弾でも「一世を風靡」した。

そこで小生も、才能のなさはとりあえず棚上げして趣味らしきものを持つと思ひ、具体的にどの分野を選択するかについて消去法で決めることにした。即ち、小学校の時、どうしても「優」が取れなかつた科目が二つあった。音楽と体操である。

先ず音楽だが、通産省の先輩に大変な音痴だという人がいて、その先輩が課長の頃、課内旅行で座が盛り上がり、先輩も歌わないと座が白けるというような状況に追い込まれたので、やむを得ず歌い始めると、ざわついていた会場が一瞬静かになった。無論、先輩の美声に聞きほれてではない。「一体どうすればこれだけ調子の外れた歌い方ができるのだろう。ああ、こんな人に歌わすのではなかつた」という強い後悔の念が参加者一同に湧いて、それが歌っている当人にも伝わり、座が一層しらけたのだ。しかし、私の歌はこの先輩以下だった。

次に体操だ。これも枚挙にいとまがない。先ず運動が大の苦手だった。小

学校三年終了までに、疎開、再疎開などのため6つの小学校に通ったという事情もあり、虚弱児扱いされて運動会に出してもらえないところもあった。くだって比較的最近の話だが、60歳代から90歳代まで各10歳代ごとに年の離れた4人でゴルフをした時など、一番若い60歳代の私がネットでもグロスでもボリで、「貫録」を示したこともあった。

こうしてみていくと、音楽と体操、この二つは駄目だ。そこへ行くと、図画は時々「優」も取った。こうして、趣味として選択する分野は絵画だ、と消去法でごく自然に決まっていた。それに絵画に関しては、次のようなこともあった。

米国勤務から帰国した時、どこに住むかという話になり、妻が「これからはご両親と同居してもいいわよ」と申し出てくれたのだ。問題は、片道平均一時間半はかかるという遠距離通勤であった。当時は未だ土曜出勤があったが、つい土曜が休みであった米国勤務のくせから、どうしても土曜は休みたくなる。しかも、一旦出勤しようものなら帰宅はなかなか困難だ。そこで小生は、土曜に原則休暇を取って絵を習いに行くことにした。車で15分ばかり行った所に絵画教室があり、サラリーマンや高校生などが来ていて、私も2、3回通ったと思う。

しかし、こんなおんきな平和が続くはずはなかった。小生は当時、通産省航空機武器課長であったが、程なく総理秘書官に任命され、住居も余り遠方でないところへ引っ越すよう通産省の杉山和男官房長から要請されて、絵を習うどころの話ではなくなった。総理秘書官から通産省へ戻っても、産業政策局総務課長、大臣官房総務課長、石油部長、貿易局長、基礎産業局長、通商政策局長、そして通商産業審議官とお陰様で多忙なポストが続き、下手の横好きの油絵の準備に手が回ったのは、漸く退官後であった。

私は「自分に趣味が一つあるとすれば、それは絵画」と決めた日のことをはっきりと覚えている。その時私は、昔の名前を使うのを許してもらえれば、遥か「満州」にいたのだ。満州平野の彼方にまさに陽が落ちようとしていた。汽車の席に座っている小生に向き合って日吉章氏が座っていた。その日吉氏が「油絵をやらないか」と言い出したのだ。

同氏と小生の関係は、先ず共に東大法学部昭和34年同期卒で、駒場の教養学部時代のクラスは違っていたが、彼は大蔵省、小生は通商産業省にそれぞれ入った。我々の関係はこれに留まらない。私の弟、畠山蕃^{しげる}が日吉氏の2年後に大蔵省へ入ったのだ。然も役人生活の後半にわが弟は日吉氏の後任になることが多く、大変お世話になったようだ。直接の後任になった主なものをあげてみても、大蔵省主計局主計官（防衛担当）、防衛庁へ出向して経理局長、防衛局長、防衛事務次官などがある。なお、残念なことに弟は、防衛事務次官在職中に病気のため退官し、間もなく57歳の若さで夭逝した。兄である小生より余程評判のいい男であっただけに、本当に残念の窮みであった。ご関心のある向きは、その10年後に小生が私費出版した「畠山蕃の生涯」をご参照いただくと幸いです。

上記の追悼録には入っていないが、畠山兄弟に関して次のようなエピソードがある。ある米国の有名大学教授が、小生も出席していた会議で次のように述べた。「日米関係には少なくとも2種類の人間が関与する。安全保障関係の人間と貿易関係の人間である。前者は友好的で、後者は対決的である。この言葉は一つの家族にも当てはまり、安全保障関係の人間である畠山さんの弟さんの方は、友好的でワシントンDCでの評判もよい。ここにおられるお兄さんの方は・・・」と言いかけたところで出席者が笑い始めたため、そこから先は発言せずに終わった。

話を満州での会話に戻す。

「油絵ねえ。やりたいのだが、いい先生がいなくてね」と小生が月並みな返事で応ずると、日吉氏はやや意外なことを言い始めた。「先生の候補ならいるんだよ。家内の父親はもうこの世にいないのだが、生前は油絵の先生だったんだ。その教え子が僕らと同じ沿線にご在住だから、君がよければ二人で一緒に習おうかと思っているのだが・・・。先生も90歳近いお方だし、月謝など一切不要といっておられるというのだが、僕一人で習うのは氣づまりだし、この道一筋で勲2等をもらわれた方を独占するのは勿体無くもあるし・・・君、この話のってみるかい？」

この問いかけに「YES」と答えて、私の趣味は始まった。